



特別国会衆議院本会議で（平成2年4月19日）

## ●政治

# 一滴の静寂

文／小林 守（衆議院議員）

一九九〇年十月三日、戦後世界政治の大転換を意味する東西ドイツの統一が実現しました。ベルリンの壁が崩壊して一年後、閉ざされていたブランデンブルク門が、全欧州に、そして全世界に向かって開かれました。この歴史的瞬間をテレビ中継を通じて世界の人々と同時に見つめていた一人として、これからの世界政治の流れの方向に、一抹の不安を感じながらも、大きな希望を抱きたいと思いました。

統一されたドイツ連邦共和国のワイツゼッカー大統領の有名な言葉、「過去に目を閉ざす者は、現在に対しても無知である」を再びかみしめてみる。この言葉がドイツ国民に深く生きている限り、私たちは希望を語る事ができるのだと思えるのでした。

戦後の東西冷戦構造が崩壊する中で、新たな世界政治の秩序づくりに挑戦するかのように中東湾岸危機が勃発し、日本の国際社会への貢献のあり方を問うための、第一一九臨時国会が開かれ

ました。国連平和協力という美名のもとに、自衛隊の海外派兵の道を開き、国連安保理決議の実効性の確保という拡大解釈をもって、アメリカ軍を中心とする他国籍軍への支援をはかる「国連平和協力法案」は、圧倒的な平和憲法を擁護する国民世論の前にその矛盾を露呈して、衆議院特別委員会段階で廃案になりました。

この法案に対して、アジア諸国民の表明した批判や懸念を私たちは深くかみしめなければならぬと思います。

一九二八年、昭和天皇の即位の年に行なわれた山東出兵は、山東省の日本人居留民に対する南京国民政府の北伐脅威からの保護という名目でした。

軍隊には軍隊の戦場の論理がありません。およそ、古今の歴史を通じて、平和を目的としない戦争はありませんでした。だから、アジア諸国民二千万人と日本国民三百万人の尊い命の犠牲と深い反省の上に立って、日本国憲法は「平和」を追求する手段として、戦争を放棄したのではないのでしょうか。

私たちは、新しい世界の政治構造の模索の中にあつて、アジア諸国や世界に対する日本の過去について、常に目覚めていなければ、日本の国際社会での「貢献」は過ちを犯すと思わずにはいられません。

同じ敗戦国であるドイツと日本の現代国際政治へのかかわり方に、とてつもない違いを垣間見ているような思い